

自分の存在価値を高めるケアマネジャーの仕事 持続可能な業務への「次の一手」

執筆▶ 田中克典 株式会社スタートライン 主任介護支援専門員

「大変だけど、この仕事が好き」。ケアマネジャーからこの言葉を聞くことは多い。「親への小さな恩返し100リスト」(主婦と生活社)、『親の介護』は猫にたとえちゃえばいい。」(日本実業出版社)など、一般の人に向けて介護の負担を和らげるためのヒントを表した多数の著書を執筆している主任ケアマネジャーの田中克典さんも、その1人だ。「この仕事の魅力を仲間と共有し、これからも続けられる方法を一緒に考えたい」田中さんがその思いと独自案を読者に届ける。

ケアマネジャーのやりがい

介護保険という社会保険制度の創設とともに、ケアマネジャーという新たな職種ができて25年が経過しました。当初は、「制度の要」として人気職種でしたが、介護職員の処遇改善がすすみ、ケアマネジャーはその陰に隠れ、「たいへんな仕事」「介護職でキャリアを積んだほうが給料が高い」といった理由で実務研修受講試験の受験者も当初に比べ減っています。また、せっかく実務研修を修了しても、「ケアマネジャーは自分には向かない」と実務に就かない人も一定数います。

私はこの流れを、非常に危惧しています。確かに責任が大きく、たいへんな仕事ですが、一方でケアマネジャーのやりがいも大きいと思っています。自分の提案を利用者が受け入れてくれ、その結果、心身の状況が改善したときなどは感

謝されます。また、デイサービスを紹介し「ありがとう。お陰様ですごく楽しく通っていますよ」などと言われれば、「よしっ!」と胸をなでおろす瞬間でもあります。

このように、利用者や家族と信頼関係ができ、喜んでもらえたら、自分自身の存在価値を高めることにつながり、人間としての成長を実感できます。料理人が、お客に「おいしかったよ、また来るね」と言われれば励みになり、「明日も頑張ろう!」と思うのと同じです。ケアマネジャーは、「相談援助」という目に見えない料理を、日々利用者・家族に提供しているともいえます。

シャドーワークにどう対応するか

私はケアマネジャー歴26年で、これからも心身の健康に留意しながら、この仕事を続けたいと思っています。一方で、この仕事から転職したいと考えてい

る人も少なからずいます。その理由の1位は「業務範囲の広さ・責任の大きさ」で、2位に「賃金・処遇」、3位が「年齢・体力面」と続きます。多くのケアマネジャーが本来業務とは別のシャドーワークをせざるを得ず、このことが転職願望につながっていると考えます。(『介護支援専門員の養成に関する調査研究事業報告書』(令和6年3月 株式会社日本総合研究所)より)

私自身も現在、独居で身寄りがなく、数匹の猫と同居し、家族同様にかわいがっている人を担当しています。しかし本人はベッド上での生活で猫の世話ができません。当然ヘルパーも猫の飼育ができず、やむを得ず私がエサやりや排泄物の世話をしています。あるとき、訪問入浴のスタッフが猫に引っかかれたことを機に、サービスの中止を告げられましたが、本人のQOL維持のため、サービス開始前に猫をケージに入れる作業を毎週おこなうことで、入浴を継続